

聖書：エペソ 2：19～22

説教題：神の御住まい

日時：2018年2月4日（朝拝）

この箇所は「こういうわけで」と始まり、11節から語られて来たことの結論部分となっています。この手紙はエペソを中心とする小アジアの教会に宛てて書かれました。ですからここで「あなたがた」と語りかけられている人たちは異邦人クリスチャンたちを指します。11～12節：「ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については外国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」 そんな彼らがキリスト・イエスにあって近い者とされ、神の民に加えられたことが語られました。それらを受けて19節は「こういうわけで」と始まっています。パウロはここで「あなたがたは、もはや外国人でも寄留者でもない」と言います。では今はどういう者たちなのか。どんな新しいアイデンティティを持つべきなのか。パウロはここで教会を三つのイメージで言い表しています。一つ目は「国民」というイメージ、二つ目は「家族」というイメージ、三つ目は「神殿」というイメージです。最初の2つは19節で語られ、三つ目は20～22節にかけて語られていますので、そのボリュームに応じて以下、順番に見て行きたいと思います。

まず一つ目は「あなたがたは、今は聖徒たちと同じ国民である」ということです。ここでの「聖徒」はイコールイスラエル人ではありません。異邦人のクリスチャンは、ただイスラエルという国の国民に加えられるのではないのです。「聖徒」とは救いの恵みにあずかった人々のことです。イスラエルについて言えば、イスラエル人全員が聖徒ではなく、イスラエルの中の言わばまことのイスラエル人が聖徒です。そのような聖徒たちと同じ国民である。あのアブラハム、イサク、ヤコブ、またモーセ、ヨシュア、ダビデ、ソロモン、またイザヤ、エレミヤ、また新約時代のペテロ、ヨハネ、パウロたちと同じ国民ということ。もと異邦人だったからと言って第2級の国民ではないのです。

国民であるか、そうでないかには大きな違いがあります。国民であれば受けられるのに、そうでないために受けられない特権は色々あると思います。私たちは自分の国籍がある国に住んでいるため、通常意識していませんが、いざ外国に行ったら大変です。病

気になったら保険は効くのか。その国に自分がいたいと思う期間、自由に滞在できるのか。収入を得るためにそこに住む人たちと同じように仕事ができるのか。子どもを連れて行ったら周りと同じ教育を受けられるのか。何らかのトラブルに巻き込まれたら助けてもらったり、権利を主張できるのか。これらはその国民であるか否かによって大きく変わって来ることだと思います。神の民も同じです。私たちは今や他国人ではありません。私たちは神の国民として、その国民に特有のあらゆる特権と祝福を受けることができますのです。パウロはピリピ書3章で「私たちの国籍は天にある」と言いました。私たちは地上にありながら、すでに天国の市民権を持っている者だと言われています。その特権に十分に気づきながら、私たちは地上の生活を歩むのです。そして地上の旅の終点で、ついに聖徒たちと同じ国にたどり着き、天の故郷で神の祝福のもとに永遠の生活をしようとしている。そのような神の国民とされているということです。

2つ目にパウロは「あなたがたは神の家族なのです」と言っています。これは一つ目の「国民」というイメージより、さらに先へ進んでいます。国民も確かに私たちを一つに結び付けるものですが、家族の絆はもっと深く豊かです。私たちは同じ国、同じ町に住んでいても隣近所を良く知らないということがあります。名前や顔は知っていても、またおしゃべりしたことはあるという程度には知っていても、本当にはお互いのことを良く知らない。しかし家族は知っています。そこにはあらゆる人間関係の中で最も親しく、いのちの通い合うお互いの関係があります。

しかもこれはただの家族ではなく「神の家族」と言われています。本来、神にとって子の関係にあるのは一人子イエス様だけでした。神は御子を私たちには測り知れない愛で愛しています。しかし聖書が語る福音は、私たちは御子イエス様を信じることによって、ただ罪を赦されるだけではなく、イエス様と一つに結ばれて、イエス様が神の前に持っている「神の子」という身分にもあずかるということです。そして父なる神に向かって「アバ父よ！」と呼びかけ、恐れずに近づいて行くことができる。また同じこの恵みに入れられた他の方々と、同じ神の家族とされていることを喜び、互いに兄弟姉妹として愛の交わりの内に歩むように導かれる。教会はそのようなものとして語られています。やがて天国で会う家族は何と多いことでしょう。私たちはイエス・キリストを信じて個人的に救われて、ただ天国に住むだけではないのです。救われるとは神の家族として迎え入れられることであり、神を中心とした家族の交わりに生かされて行くことなのです。

パウロが三つ目に語っているのが教会は「神の宮」「神の神殿」ということです。一見これはイメージが後退しているように思えるかもしれませんが。一つ目の「国民」から二つ目の「家族」へ移った時、より人格的で温かい関係へ進んだように感じたと思います。では次はどんなことが言われるのかと思って読み進めると、何とここで「建物」に私たちがたとえられています。何か逆戻りしたかのような、いのちがなくなったような、私たちは冷たい石なのか？と戸惑ったかもしれません。しかしそうでないことはイスラエルにおいて神殿がどれほど重要な位置を占めてきたかを考えてみれば分かります。たとえばダビデは詩篇でこう歌いました。27篇4節：「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」 65篇4節：「幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の良いもので満ち足りるでしょう。」 イスラエルにとって神の宮、神殿は主のご臨在の象徴でした。そこは彼らが主にお会いすることのできる憧れの場所でした。その主の神殿に自分たちがたとえられているのです。これはどういうことでしょうか。

聖書を追って読んで行く時に分かることは、旧約時代の神殿は実はイエス様を指し示していたということです。ヨハネの福音書1章14節：「ことばは人となって私たちの間に住まわれた。」 「住まわれた」という言葉は「幕屋を張られた」という意味の言葉です。つまり旧約時代に幕屋あるいは神殿を通してご自身が民とともにいることを示して来られた神は、今やイエス・キリストという幕屋あるいは神殿を通して、ご自身がともに住みたまうことを現わしておられる。またイエス様はヨハネの福音書2章19節で、ご自分のからだを指して、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは三日でそれを建てよう。」と言われました。イエス様はその通り、十字架上で死に、三日目に復活されました。そしてそのイエス様に私たちは今や信仰を通して結ばれています。つまり神のご臨在が豊かに現されている神殿なるイエス様に私たちが結ばれることによって、今や私たち自身が神殿となる。1コリント3章16節：「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」 このことを考えると、この三つ目のイメージは後退しているどころか、いよいよ素晴らしいものであることが分かるのです。

この神殿について残りの時間で二つのことを見たいと思います。一つはその土台につ

いてです。20 節：「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており」。一つの使徒とはイエス様と生活を共にしたイエス様の目撃証人であり、かつイエス様ご自身から直接この働きに任じられた人です。二つ目の預言者とは、3 章 5 節から分かりますように、新約時代に使徒たちとともに神の啓示の担い手になった預言者たちを指します。この使徒と預言者が教会の土台であるとはどういうことでしょうか。それは一言で言えば、新約聖書の教えの上に教会は建てられたということです。これは旧約聖書は関係ないということではありません。新約聖書は旧約聖書を土台にしていますから、そういう意味では旧約聖書ももちろん教会の土台と言ってもかまいません。しかしこの表現はその次の「キリスト・イエスご自身がその礎石です」という言葉と関わります。使徒と預言者は、この礎石なるキリストをはっきり示しています。もちろん旧約にもキリストについての預言はあります。いや旧約聖書全体はキリストを指し示しています。しかし時満ちてついに約束のメシヤが現われました。そして新約聖書はいよいよこのキリストについてはっきり語っています。この方はどなたなのか、そのご人格について、またその方は何をされたのか、そのみわざについて、特に十字架と復活について。これらは使徒と預言者すなわち新約聖書にこそはっきり語られています。その「明確な教え」の上に教会は建てられているということです。

ですから私たちは教会が教会であり続けるために、常にこの土台を大切にしなければなりません。人間の知恵や考えを土台にしてはならないのです。あるいは今日、新しい啓示を受けたと称するいわゆる預言者たちが出ても耳を貸したり、惑わされてはならないのです。教会の土台は使徒と預言者によって一度限りかつ永遠に据えられたのです。そしてこの聖書のみが教会の土台と言う時、その焦点であるキリストに第一の関心が向けられなければなりません。使徒と預言者は色々なことを語ったのではなく、つまるところキリストについて語ったのです。キリストこそ教会という建物全体が拠りかかっている最も重要な礎石です。その礎石なるキリストの上に私たちは使徒と預言者を通して結び付けられている者たちなのです。

もう一つここから心に留めたいことは教会はこのキリストに結ばれて成長過程にあるということです。そのことが 21 節と 22 節に示されています。この 21 節と 22 節は原文を見るとパラレルの関係、並行関係にあることが良く分かります。新改訳 2017 の訳はこうなっています。「このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げ

られ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」 21 節と 22 節のどちらも原文では「この方であって」（すなわち「キリストにあって」）という言葉から始まります。そして次に「建物が組み合わされて成長し」とか「ともに築き上げられ」という同じような意味の動詞が来ます。そして最後にその成長の目的とするところが「聖なる宮となる」とか「神の御住まいとなる」と記されます。ここから「聖なる宮」と「神の御住まい」は同じことを指していることが分かります。そしてこの二つの節の大きな違い何かと言うと、22 節には「あなたがたもまた」という言葉が入っていることです。つまり教会は神の神殿であることをただ一般的に語るだけなら 21 節だけでも良かったのですが、パウロの関心はこの手紙の読者たちである異邦人クリスチャンたちにもこのことを当てはめることです。そこで彼はあえて 22 節の言葉を書き、そこに「あなたがたもまた」という言葉を加えて、このことはあなたがた異邦人クリスチャンにもその通りに当てはまることなのですよ！というメッセージを送っているわけです。

さてそのことを押さえて、ここを読んで分かることは、ここで言われていることは教会は礎石なるキリストの上で組み合わされて成長過程にあるということ、建設途中にあるということです。ユダヤ人も異邦人も一つにされ、また様々な背景や賜物の異なる者たちも結び合わされて、さらに高く伸びて行くようにと導かれている。その向かう先は何でしょうか。それが「聖なる宮」「神の御住まい」ということです。私たちはキリストに結ばれて、すでに神の神殿とされていることを先に述べましたが、現在の状態が最終状態ではありません。その究極的な完成は将来に置かれています。その姿がヨハネの黙示録 21 章 3～4 節にこう書かれています。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。」 23 節：「都には、これを照らす太陽も月もない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。」 22 章 5 節：「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もない。」 この究極的な祝福に向かって、キリストは私たちを建て上げ、その成長を導いて行ってくださいなのです。

私たちは教会をこのようなものと受け止め、感謝し、この御心に沿う歩みをささげているでしょうか。神はキリストにあって教会をご自身の御住まいとし、ご自身が栄光を現わす場としてくださっています。私たちは教会を通して神の救いにあずかり、今日ま

で豊かに養われ、恵みの内に生かされて来ました。そして神はいよいよキリストにあって教会を最終的な御住まいとする栄光の日に向かって導いてくださっています。私たちはこの恵みの内に置かれていることを覚えて、今朝心からの感謝の礼拝をささげたいと思います。そして教会の唯一の礎石である方に、使徒と預言者を通して益々しっかりつながって行きたい。そのキリストの恵みと力によって、いよいよふさわしく建て上げられ、成長することができますように。旧約の神殿に神の栄光が満ちたように、教会が神のご臨在と祝福の豊かに満ち溢れるところとなりますように。そして人々に神の栄光を宣べ伝え、人々を救いへと招きつつ、神が究極的に私たちの内に住まわれる完成の日に向かう教会の歩みを導かれて行きたいと思います。